

最近の若手の傾向と 困った出来事

―最近の若い先生方の傾向をお聞かせください。

山田 わりと優秀な方が入ってきてますが、失敗や挫折しそうになると「もうできない」とパッと切り替えて諦めてしまつて、「乗り越えよう」というエネルギーの弱さを感じます。例えば、ある先生は生徒会長がアイデアを出した時に「時間がないから無理」「やったことないから無理」と「無理」という言葉が多く、できる・できないでスパンと割り切つてしまっています。

勉強のできない子が学級委員に立候補すると、「お前できるのか」と言つてしまう先生もいます。自分ができてきた人が多いので、子どもと一緒に悩んだり考えたり、寄り添つて進むというのが少し苦手なようです。5〜6年経つと、これくらいいいかと自分の中で満足してしまつ方も増えてきました。

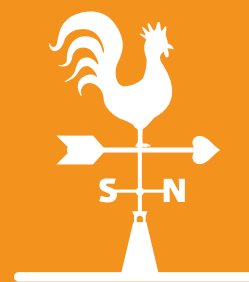
また、若い先生は非常に発想が豊かで元気ですが、だんだんと小さくなり良い発想が型にはまつてくるイ

きるようになってはいますが、自らやつてみようというパワーが足りないと思います。

また、職員室で歳の近い同僚同士がとても丁寧な言葉使いで話しています。ところが、肝心の授業の場面では「あのさあ」「だよね」「じゃん」という言葉使いになります。自分が若い頃とは逆なので不思議に思っています。

小学校の場合は特に全科ですので、教師の発する言葉は子どもたちにとって言語環境そのものです。子どもたちには美しい日本語で、同僚とは形式ばらずにもっと打ち解けて話してほしい。親しそうには見えませんが、指導法とか学級経営の悩みとか、そういう内容はあまり話していないようです。表面的で楽しい当たり障りのないことだけでなく、一番話したいことやもっと深い話をすればいいのと思います。

小澤 今の若い方たちは、いろいろなスキルは持っています。私が教員になった40年近く前は、パソコンもなくOHPを使つていました。今は格段に進んでICTを使う授業にも対応できて、潜在能力がたくさんあ



座談会 現役校長に聞く

若手の育て方と伸ばし方

ベテラン教員の大量退職時代を迎えて、若い教員が大量に誕生している学校現場。経験の浅い若手教員と、指導にあたる多忙な中堅教員それぞれの成長が鍵を握る時代となる。これからの学校教育を担う人材の資質能力向上を目指し、日々奮闘する3人の現役校長から貴重な意見を伺った。

メッセージがあります。言われたことはきちんとやりますが、自分の発想でやろうというのが弱く感じるのので、もう少し自由奔放にアイデアを出してほしいですね。

研修で「こうやるんだよ」とか授業も「指導書どおりに」などと言われて、勤務するうちに何となく型にはまつてくるのかなと自身の反省でもあります。もう少し自由にやらせて失敗も経験させてあげたい気もします。

一方で、失敗は避けたいので前例どおりにすることが多いのですが、それでは学校がなかなか活性化しません。後の責任はとるから自由にやってみるという大きな気持ちで、我々管理職には必要かなと思います。

平林 若い方は、話を聞きながらメモをとるのが上手で、指導された時も素早くメモして「はい、わかりました」と良い返事をします。噛みついていたり言い返したりする人はほとんどいませんが、指導されたことをやつてみる気配がない。それで指導する教員のモチベーションが下がってくるという話をよく聞きます。

研修を受けてさまざまなことがで

ると思います。でも、そういう力を発揮できないようにしたのは我々なのかなと時折考えます。

今の若手の先生方は、我々が一番脂が乗っていた30代・40代の頃に教えた子たちだと思っています。当時はゆとり教育という言葉が代名詞としてありましたが、その時に突き詰めてとことんやれていたのかなと自責の念に駆られます。

もう少し前の時代だと、授業づくりとかさまざまな活動をもっと入り込んでやつていたと思いますが、平成になってからは少しサラッとやつていたかなと。そういう時代に育った子どもたちが今の教員になって、とてもスマートだけど薄っぺらい。表面的に関わって、すぐに「もうダメです、もういいです」と判断しないで、もう少し踏み込んで関わってみたらと思いますが、もしかしたら我々がそんな関わり方をしてしまったのかなと。東京都は40代後半から50代の先生が少なくそれを伝えきれていません。若い人たちに考え抜く、話し尽くすというようなことなど、我々がリタイアするまでに伝えていけたらと思います。

学び続ける姿勢を
持ち続けてほしい



◆山田 貞二 やまだ・ていじ
1961年 岐阜県生まれ
愛知教育大学卒業
高校時代の友人の一言がきっかけで教員を志す
愛知県一宮市立大和中学校長、愛知県教育委員会
義務教育課主席指導主事などを経て
愛知県一宮市立浅井中学校長
愛知県小中学校長協会理事

もっとおもしろがつて、
もっと楽しんでやってみよう！



◆平林 久美子 ひらばやし・くみこ
1961年 東京都生まれ
関西学院大学卒業
玉川大学（通信）単位取得
児童養護施設の勤務をきっかけに教員を志す
社会福祉法人善照学園
昭和61年度より東京都公立小学校教員、
新宿区教育委員会指導主事などを経て
墨田区立両国小学校長
全国公立小・中学校女性校長会会長

子どもたちと、
仲間と一緒に楽しんで



◆小澤 雅人 おざわ・まさと
1958年 東京都生まれ
日本大学大学院卒業
子どもたちと共に歴史を学んでいこうと思ひ、教員を志す
杉並区及び青梅市立公立中学校長
東京都教育庁人事管理主事などを経て
杉並区立阿佐ヶ谷中学校長
東京都中学校長会会長

若手が多いということは、若手が力を合わせたら回り始めるということなので、私が初任者の頃とはまったく違います。任せてみると力があることがわかりますし、力を合わせればできるかなとも思います。あまりに抜擢し過ぎると校長があの人に目を掛けてるという感じになってしまいましたが、みんなやってと言うと相互評価にもなります。

小学校は本当に若手が多くなりました。でもそれをマイナス要因にするのではなく、パワフルな部活のような流れができれば追い風になると思います。

小澤 校長は教職員の力量を把握しなければなりません、自分の物差しを幅を広げるしかないと思います。自分の理想やゴールがあると思いますが、思うような結果に至らなかったとしても、それでもよしとする範囲を広げておかなければいけないと思います。

この人をお願いしても結果的にダメだった場合、潰したくないけど批評してしまうことによって次のモチベーションが上がらなくなってしまう。でも、許容範囲を伝えてしま

うとゴールが下がっていつてしまうので、自分としての理想の形がある程度示してそこまでやらせてみる。あとは、いろいろなことをさせる時に「いいよ」という言葉を最初に言つて、本来はこうしてほしいと伝え方を工夫してみます。

―物差しの幅を広げるといのは、大変共感できます。

小澤 何でもOKではなく、それぞれの役割やスキルなどを見て幅を持たせます。あとは、教頭先生、副校長先生がキーマンです。本来は我々の方で作る書類など最終決裁はこちらですが、どうしても任せていくこともあります。それによって本人が自信を持つて、発言や行動がもっと広がってくるという感じがします。

また、本校が区役所と隣り合わせということも大きなメリットです。先生方が参加するわけではないのですが、研修などの情報をこちらが提示しなくても入手できます。場所を提供するだけでも本校の利点になるので、その環境を上手く使っていくというのがあります。

研修は「育てる」ではなく少人数のグループで話し合いをさせて「学ぶ」という形にします。最初はセッティングしないとやりませんが、1年ほどして軌道に乗ってくると自分たちでできるようになります。自ら勉強して学校も活性化してきます。飲み会も自分たちで開くようになるので、ゲストで呼んでもらって不満を聞いてやるとか、YMLが折れないようにしています。

人選は、スマートな人ほどボキッと折れやすいので、子どもと一緒に困ったりするような学級経営を見ていて一番泥臭くて、何でもトライしてみる人を選んでいきます。育つのは、その人のやる気やモチベーション次第。うまく育たない子や、やらされた感のある子もいますが、勉強したことは残るのでどこかで気が付くと思います。

あとは、有料の研修になるべく腹を切らせて行かせます。管理職も同行させて一緒に学んでもらいます。実際は管理職を育てる方が大変です。忙しくて勉強する時間がない中でもSVとしての素質を作り、自分も一緒にやろうとやる気にさせる



―管理職になってから若手の時の経験が生きていると思うことは何ですか。

山田 30歳になった頃、勤務していた小学校に県教委から校長が赴任してきて、突然研究主任に指名されました。初めて勉強することと人を動かすことを、指示することを学びました。そういう場をもらうということは非常に大事だと思いました。

その校長は、ああしろこうしろとは言わず課題を出して、あとは見守る。成果を持つていくと端的なアドバイスくれる。今思うと、そうやって育ててもらっていたのかもしれない。梓にとらわれない方で勉強になり

ましたし、私の手本となりました。そのスキルを知らず知らずのうちに真似していて、YMLにも生かされています。

二つ目は、教員も遊びが必要だと言われたこと。教員の仕事だけに没頭しないで若手同士で何かをするとか、旅行とか自分と違う世界を知る

若手を育てる工夫と伸ばすための手立て

―若手の褒め方や、伸ばして育てるための工夫を教えてください。

山田 みんなで学ぶ場を学校の中で提供しています。最初は若手を育て



YML、管理職が育つて一石三鳥になります。

YMLを学校の一番メインのビジョンに合う部署へ持つてきて、本校の場合は道徳と生徒指導と生徒会ですが、YMLを主任、教務主任をSV、ベテランを副にしています。

YMLを作り、若手が一緒に学ぶ会を作れば若手が育つ。まだ未熟なので、教頭や主幹、教務主任がスパーバイザー（SV）としてフォローする。若手、

YML、管理職が育つて一石三鳥になります。

YMLを学校の一番メインのビジョンに合う部署へ持つてきて、本校の場合は道徳と生徒指導と生徒会ですが、YMLを主任、教務主任をSV、ベテランを副にしています。

やらされてる感ではなくて、自分たちでやってる感を持たせないと楽しくないし、生きがいにもなりません。方針だけ出したらあとは引込んで、やってくれたらとにかく「ありがとう」とか、「教育委員会が我慢してきたよ」とか知らせるようにしています。

ことが大事です。

平林 本校では全員が講師と受講生になるような場面を多くしています。学習会などでもリーダー格が教えるのではなく、初任者からベテランまで、私を含めて全員が何かの教科を担当します。そんな中でヤングリーダーも生まれてきています。

例えば、若手が学力向上委員会を立ち上げまして、校長が立てる全体計画に六つほど提案をしてくれました。教育委員会には「本校の学力向上委員会の若手が作りました。私の方針と幾分も違わないので、直さずにそのまま持ちました」と提出します。若い先生たちが話し合い作ったものを提出して報告できることと、指導主事の先生に所属の教員が褒めていただけることは本当にうれしいです。

やらされてる感ではなくて、自分たちでやってる感を持たせないと楽しくないし、生きがいにもなりません。方針だけ出したらあとは引込んで、やってくれたらとにかく「ありがとう」とか、「教育委員会が我慢してきたよ」とか知らせるようにしています。



強会を開いています。学校と家との往復になりがちですが、学校以外の交流はどこかで作らないとできないものだと思います。井の中の蛙にならないように、若い先生に伝えていくのも我々の仕事だと思っています。

ことも必要だということです。仲間作りを積極的にしていくことも大事です。

三つ目は、学ぶ場を作ることです。私は我流で勉強していました。30歳くらいの時にもっと勉強しておけばよかったという後悔があつて、今が一番勉強しているかもしれないかもしれません。きつと財産になるので、若手には半強制的でも学ぶ場を作つてやるのが大切だと思います。

若い頃は学ぶ場がどこにあるかわからなかったのですが、思えば先輩方がいろいろ連れて行つてくれました。今はネットにも出てきますし、学ぶ場がいっぱいあつて幸せですね。

―仲間作りに積極的な人が少なくなってきたと。

山田 学校で遅くまで話していて社交の場になつてはいますが、それを外でもやつてほしいです。結婚すると縛りが出てきますが、若い時は自由がきます。学校と家との往復では人間の幅が広がりません。私は出合いの場がない若い先生方のために、異業種間の婚活をしています。パートナーができなくても、いろいろ

ろな人と話すことで人間の幅や教員としての幅も広がるのではと思つています。

平林 私の場合は、国語の研究発表の時に主任の方が体調を崩されたので、当時職場で2番目に若かった私が主任に選ばれて「どうしよう」と思いました。若いし、わからないわけですから。当時、国語の大家の先生の話が難しかったので、私なりに解釈して絵や図に表したものを通信として出すようにしました。研究主任としての悩みや疑問、チャレンジしたいこととか、その時の経験が管理職になつてからも新しい教育課題に立ち向かう時に生きています。校長でもわからない部分は誰か教えてとか、発信して返りを待つというようなことをそこで学んだかと思ひます。

また、若手が少ない時代でしたので、教育の歴史を語れる先輩たちからたくさん話を聞かせてもらいました。若手同士で話すのも大事ですが、自分より大先輩の人の話を聞いて今と照らし合わせながら考える機会もいいなと思います。本校では時々90歳近くの先生に来ていただいて自由

な勉強会をしています。

―それはどのような勉強会ですか。

区の副校長たちが立ち上げた会で、栗岩英雄先生の蔵書をテキストにしています。昭和30年代から40年代に書かれた国語教育に関する本です。根本的に昔からどうだったのか、どんな理論があつたのかなどは私たちが世代でも教えられないんですね。戦後すぐの時代に現職で実践していた人たちにしか語れないことがあります。栗岩先生が理論を話されて、私が、「当時小学生だった私は、こんな授業を受けました。担任の先生はこんな語り口で教材を読む前にお話をされました」というように話をさせていただくこともあります。結構おもしろい勉強会です。

20代から90代くらいの幅広い世代で学び合うことも、私の経験上とても役に立っています。研修では不易と流行の流行の部分の学ぶことが多いのですが、大先輩からは不易の部分を学べるので、すごくいい時間です。

小澤 僕は破天荒なことをいっぱいさせてもらったのが大きいですね。初任校ですぐに1年生の担任になつ

管理職から若手へのメッセージ

―これから若手に期待することは何ですか。

山田 一つは人間としての幅を広げてほしいということです。学校の中で学び、目標となる先生をつくるのも大事です。また、自腹を切つても外へ飛び出し、いろいろな人たちとのつながりをもつてほしいです。人脈は財産です。人と出会つて感化されることで考え方や性格、行動パターンも変わりますので、人との縁を大切にしたい方がいいです。

二つ目は学ぶ姿勢を持ち続けること。本業である授業を楽しくするためにも、勉強会や本、資料探しなどにも投資をしてください。

三つ目は、一人の生徒も見捨てないということです。まずは共感することからスタートして、どんな子でも寄り添つていく姿勢で教師を続けてほしいと思います。

平林 子どもに活動をさせた時には、腕組みして「評価しなきゃ」という気持ちになると思いますが、もっとおもしろがつて、楽しんで



て、その年の学校行事の計画を全部任されました。2年目は修学旅行の担当です。

先輩方や校長先生は教えてくれながらも口出しせず、最後までやらせてくれました。運動会では聖火リレーをやることになって、屋上に大きな鉄鍋を掲げて導火線に火を点けたり。それだけじゃつまらないのでハトを飛ばそうとしたら、校庭に1羽も来なくて全部裏側に飛んでいった。ハチャメチャで大変でしたが、

子どもと一緒にやつてみようという姿勢を持ち続けてほしいです。

あとは、忙しいとは思いますが、同業者以外にもつながりを持つように。学生時代の友達は異業種の人材の宝庫なので、人と会つて何かを生み出してほしいなと思います。私自身も辛い時など同級生にずいぶんと助けられてきましたので、人を大事にしてほしいです。

小澤 僕は、「自分にとって生涯無二の先生は担任でしょ。だから、あなた方は目の前にいる生徒たちの無二の先生なんだよ。関わつてしまつたんだから、とことん関わつて」と言ったことがあります。人と関わるというのは必然だと思つて、楽しんでほしいです。

また、人は初めてのことや辛いことは自信を持つて取り組めないものです。でも、学校は一人でやつていくのではなく、いつも周りに同僚や先輩がいます。自分だけと思わないで、わからない時は聞けばいいし、一緒にやろうと言えばいい。自身でできることはたくさんあるので、自信を持つてやつてほしいなと思います。